

たはら 探訪 歴史 32

TAHARA History Inquiry Club

歴史から防災を考える

台風は、地震と並び、われわれの生活を脅かす災害の一つです。昭和28年9月25日に襲来した台風13号は、室戸台風（昭和9年）以来最大規模の台風といわれ、名古屋地方気象台伊良湖測候所では、最低気圧957mb、最大瞬間風速39・9mを観測しました。この台風は、戦後の復興へと進んでいた渥美半島に大きな被害を与えました。

ここに紹介する資料は、被害の大きかった波瀨町の様子を伝えるものです。

当時の議会議員の日記に次のよ



青尾新田堤防の決壊

うな一文がありました。

消防は朝から此の警備に当たって居るが、丁度満潮時に風は西風に変わる。火の見る半鐘は乱打ちされた。実に気味が悪く、今思出しても身がぞくぞくする。それと同時に波浪は一度に浜を打ちこす。警戒の消防は逃げる道もなく、それぞれ近道を逃げる。其の後を井田・細田・塩田一面さながらナイアガラ瀑布の様な有様。…井田・細田は一丈近い冠水で稲も芋も全滅となる。この惨状を眺めて立つ村の人は一人として涙のない者はない。今取れる米をあてに全部出してしまい明日からの食糧を心配せずには居られない（原文ママ）



義援金を募るポスター

なんと生々しい記録でしょう。現在では、明日の食料を心配するという場面はほとんどありませんが、まだまだ食料を自給に頼っていたこの時代では、生死にかかわる現実的な問題だったのでしょう。

地震や台風など、自然災害の発生を防ぐことはできません。しかし、人類が誕生してから現在まで、私たち人間はこれらの災害をただ受け止めていたわけではありません。人間は過去の体験を教訓に、対策を立ててきました。それは、自然災害の被害に遭いにくい場所に居を構えたり、耐久性の高い建築物や構造物な

どや災害を予知する方法を開発したりすることに生かされてきました。左の写真は、台風13号被害者への義援金依頼のポスターです。災害は、人々の助け合いの精神を呼び起こします。そこからは、普段の心構えと、いざというときの相互の援助体制が大切であると改めて実感できます。

みなさんも、過去の災害の様子を知り合いの方に伺い、その教訓を学んでみませんか。（増山）
今回ご紹介した資料は波瀨町の立岩弘之さんから提供いただきました。
生涯学習課 ☎ 23局3531